
世界の片隅で～僕が見ていたものは

夏実歓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の片隅で僕が見ていたものは

【著者名】

ZZマーク

N6162F

【作者名】

夏実歡

【あらすじ】

夕陽に染まった部屋で僕は電子炊飯器に命があることを判然と悟る。その後、壁の怪しい染みのマイクとの対話を通じて僕の得たものは・・・

1 (前書き)

ほとんど短編になる予定です

真つ赤な夕陽が部屋を赤く染めていく。まるで、熟れきった柿みたいな色でバカに綺麗だナアと思つた。

僕は素っ裸だった。

何だつて素っ裸でこんなことを考えていいのだろうか？
簡単な話だ。だつて、僕は惄んでいるから。

悲しいかな、今の僕にはこうやって素っ裸でいるぐらいしか、この腹のそこから湧き上がる感覚に抗うすべは無い。

どうも狂つてしまつたのかかもしれない。

全ては一日前に遡る。その時の僕は今と同じように夕陽に染まっていく部屋で、夕飯前の漠然とした時間を過していた。その時は、まだ夕陽の美しさも感じずに・・・

突如として、僕は判然と悟つたのだった。或いは宇宙の意思だったのかもしれない。僕は電気炊飯器が一個の知性を持った生き物であることを知つたのだった。

僕は読んでいた雑誌を放り投げて、あまりの感動に叫びだしたかった。

でも、叫ぶとこの狭いアパートでは近所迷惑になるので辞めた。

1 (後書き)

すゞしく久しぶりに投稿しました。
シユールなものに仮託してちょっと近況を整理しないと生きていいく
こともままならない気分なのでとりあえずリハビリがてら書きます
ので懲りずにお読みみてください。

止まっている話も少しずつ進めていく予定です。
そちらもよろしく。

そう考えた僕は部屋の壁の染みに向かつて語りかけた。僕は神にでもなつたかのように語つた。染みよ！聴きなさいと・・・

ちなみにこの染みと言つのは、ミックキーマウスを尖らせた様な染みで何回消しても必ずぼんやりと浮かび上がつてくる怪しい染みだ。こいつのおかげで、僕は何人かの友人を失う羽目になつたくらいだから、きっと何かあるのだろう。僕自身はたまに人の視線を感じるくらいでとくに迷惑はこうむつていないので気にしていないが。

そして日がすっかり落ちたころ、まだ僕は延々と電子炊飯器について壁に語りかけていると、またもにわかに信じられないことが起つた。染みが突然しゃべりだしたのだ。

それはそれは渋い声だった。

「そんなこといまさら言われてもなあ」

お前、しつこいねと続けながら、そもそも自然のよつて言つた。

僕はまるで世界がひっくり返つたような思いだつた。

だつてそういうの？僕が世界に先駆けて発見したと思つた、電気炊飯器が生きているところの世の心理はもう当然のことだつたんだから・・・それこそ、壁の中の染みでも知つてゐるくらいの事だというんだから・・・

あまりの恥ずかしさに、死んでしまつてもいいくらいの衝撃だつた。すっかりしょげ返つていた僕に向かつて染みは告げた。あの渋い声で・・・

「まあ、そう落ち込むな、本当のことを知るのに遅いっていうことは無いじゃないか」

まったくその通りだつた。僕はこの怪しい隣人の言葉ですっかり目からうろこが落ちたような気にさせられた。

新しいことを知るのに遅すぎるということも無い。孔子先生も、
齡五十にして学ぶもまた大過なき、といつてゐるではないか！

染みは続けていった。

「ともかく、俺はお前の世界が広がった事を心から祝福するよ・・・俺にはお前を抱き締めてやることもできないが・・・」

この壁の賢者、どこからともなく染み出す頬りがいにこの言葉は結構具合がよい、はその皮肉っぽいしゃべり方とどがつた外見には似合わず深い愛をたたえてこちらを見ていた（様に感じた）

「あなたの名前は何でしようか？」

僕は思わずかしこまつて訊いてしまった。

「好きに呼べばいい。名前なんてただのシンボルみたいなものだ。求めに応じてかわるものだから・・・」

と、いうので、彼をマイキーと呼ぶことに決めた。もちろん、ミッキーに似てるからマイキーだ。彼は頓着しないのだし、第一印象でもう、それしか思いつかなかつた・・・ゴメンよマイキー！

僕とマイキーは夜を徹して語り合つた。マイキーはまさに博識にして聰明だった。皮肉るような調子も、だんだんと僕が気にならなくなつたのか、それとも彼が辞めたのか、まるで感じなくなつた。マイキーをたかが壁の染みだとさげすむことは何人にもできないことのように思われた。

そうたとえブツタだつてイエスだつてだ！

それどころか、マイキーが彼らと同じアパートに住んでいたって僕はちつとも不思議ではないと思うくらいだ。

「マイキー、君はいつたい何だつてそんなに何でも知つているんだい？それになんで、壁の染みなんだい？」

赤くなつてしまふくれた目を瞬かせつつ僕は尋ねた。

「それは若干長くなるな・・・また後にしよう。そつ、一眠りした後だな・・・眠くなつちまうような話さ！つまらない長い話・・・マイキーは優しく言った。すでに窓の外には白んだ空が広がつてい

僕は軽くうつなずくとじつたりと倒れた。
た。

気が付いたら、窓からは長くて赤い光が差し込んでいた。

マイキーは相変わらずの格好で、壁に張り付いていた。おどけたねずみの格好だ。

そこで、初めて僕は、今までのことが全部、夢だったんじゃないかと思つてみた。そう、夢だったんじゃないかと思つてみたんだ。

「よし、起きたね」

ゆっくりとマイキーの声が響いた。どうにも、その声さえ夢だと思うことがきっとあの時の僕にはできたはずだが、僕はそうしなかった。

それは僕の中にいくつかの希望があつたからだ。

そして、マイキーの話は本当に長かつた。物語るところのは本当はこんな感じじゃないかと思つたほどだ。内容も素晴らしくわくわくするような、後、泣けたり恐怖におののいたりできるものだったといふことに明言しておく。

ただ、本当にあまりにも長いし、僕が聴いたのも結構要約だつたし、何より、あのマイキーの語りで泣ければこの感動は生まれないので、皆さんにもぜひマイキーの生の語りで始めてを体感してほしいから、内容についてはここで語らない。

すじく単純に言つと、マイキーは元々人間で、戦前の新興宗教の開祖様で、神に選ばれた男だったが、恋人との出会いや、組織の分裂、そして未来が見えたり見えなかつたりの末、狂信的な信者に殺されて、本当の墓は別にあるのだけれど、その墓には死体は入つてなくてこのアパートのあつた場所の屋敷の壁に塗りこめられたそうだけど、戦争中の空襲で、昔の建物は跡形もなくなつて、誰もそのことを知る人がいなくなつたとき魂の開放と共にこのアパートの壁の染みになつたのだ！なんと美しい話だらう……

とか、そんな感じだ。きっと、マイキーはアカシックレコードの端っこにソリソリと並んでいたんだろうなあと僕の考えはおそらく間違つていなかつただろ？あと、電子炊飯器のことも、悲観することが無かつたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6162f/>

世界の片隅で～僕が見ていたものは

2010年10月13日20時25分発行